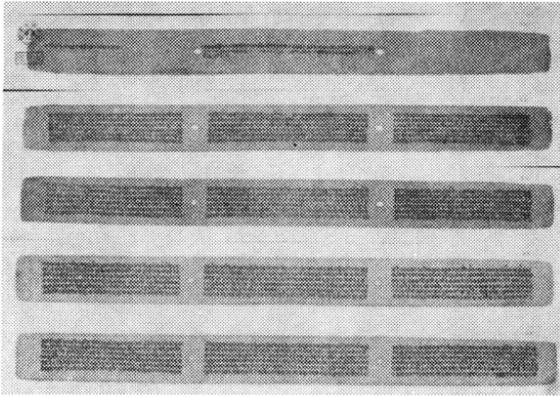


寄贈される!!

北京・民族文化宮図書館所蔵

梵文写本『妙法蓮華經』



本年三月、待望久しかった北京在民族文化宮図書館所蔵のネパール本梵文『妙法蓮華經』写本の影印版が出版(限定二〇〇部)され、この六月に、中国仏教協会より本学にその一部が寄贈された。この出版は原写本をそのままにコロタイプ版によってカラー印刷されたものである。今日迄、未公開のままの写本が世界各国に存在しており、又、公表されてもその形式に不統一があったり、原写本の状態を知り得なかつたりで、今日の学界の強い要望をほとんど満たすことのなかった現状において、本出版は今後の写本の公表に明確な指針を与えたものとして評価されるべきである。先ず、最初に、本学への寄贈に対して、そして、この良識に対して絶大なる謝意を表さなくてはならない。

地域に流布した一級の經典である。そのことは今日迄各地で発見された梵文諸写本の中で、数的に最多を誇ることからも、その流布状況を窺い知ることができよう。

梵文『法華經』写本は発見された地域と書体とから、ネパール本、ギルギット(カシミール)本、中央アジア(西域)本の三系統に分類される。各々の系統、写本の年代によって写本間に相当の相違が見られ、その伝承形態の視点より、仏教学、言語学、東西文化交流史といった種々の立場からの研究が国際的に多数の研究者によって盛んに進められている。一九七七年、梵文法華經刊行会より出版された(現在も継続中)『梵文法華經写本集成』(全一五卷)は、それ迄の発見された『法華經』写本三〇数種を組織的に整理した一大事業であるが、これは言うてみれば、二世紀に亘った『法華經』写本研究の集大成でもある。ところが、その後、三系統の一つ、ギルギット本の五〇葉(実質三〇葉)の写本断簡(Oskar von Hinüber: *A New Fragmentary Gilgit Manuscript of the Saddharma-pundarikastura*, 1982)そして、今回の

『妙法蓮華經』と題するこの經典は鳩摩羅什訳による名称で、竺法護訳の『正法華經』等と並び、一般に『法華經』の名で親しまれている大乘經典の一つである。梵語原典の題名は *Saddharmapundarikastura* といふ。「正し教への白蓮」という意味をもつ。この『法華經』は周知の如く、法華信仰を支えられ、西北インド、中央アジア、中国、日本等の多

その出版は、終結を思わせた写本の存在に更なる可能性を抱かせることとなった。

ネパール出土梵文『法華經』写本は、一九世紀前半にイギリスのネパール駐在公使 H. Hodgson によってその蒐集が始められて以来、今日に至る迄、多数の写本が発見されている。その数は、紙本、貝葉本を合せて三〇本を超える。紙本はその書写年代が新しい為、資料的価値は乏しく、貝葉本が主たる研究対象となる。この貝葉本は従来迄、東洋文庫、東京大学図書館、ケンブリッジ大学図書館、大英博物館、ネパール国立古文書館所蔵の計一二種が知られていたが、ここに、民族文化宮図書館所蔵本が新しく加えられ、一三種となる。この新資料貝葉本はネパールより伝来され、チベットのサキャ寺に所蔵されていたのが、一九六〇年に発見され、以後、北京の民族文化宮図書館に保管されていたものである。この図書館には他にチベットより傳來された相当の数のほろ梵語仏典等の写本も所蔵されているといわれている。現在、この図書館では研究活動に役立てる為に、文献の図書目録の作製、再出版等に全館をあげて取り組んでいるとの報告は、必ず近い将来にその成果が我々に届けられるとの確信を抱かせる。

今回、寄贈された複製版は豪華な装丁が施された箱に納められ、その第一枚目は中国仏教協會会長・趙朴初氏が揮毫された書名『妙法蓮華經』が、二枚目は北京大学副学長・李羨林氏によるデーヴァ・ナーガリー書体梵文書名が、そして、三枚目(表裏)には同氏による引言が付されている。この写本は貝葉枚数一三七枚、二七四面で全体を呈しているが、最後の二三七Bは書写されていないので、書写面数は正確には二七三面となる。この写本の素材は貝葉であり、写本寸法は五四・三×四・九(cm)、写本の行数は六行、書体はクテイラ文字より成る。その書写年代は一〇八二年三月一七日と記されており、他の一二貝葉本とはほぼ同じ一世紀のものであるが、ネパール諸写本全体より見れば古層に属する。写本には梵夾用の二箇所(紐穴)があり、一面が三等分された形で書写されている。書体も同一人で書き綴られた如く、一定し統一がとれており、各一行における文字数も凡そ一二二文字前後と一定内に収められている。全体的に他の一二貝葉本と比較して、完全とも言える

写本で、その保存状態の極めて優れていたことが窺い知れる。しかし、厳密に眺めてみれば、若干の問題点もないことはない。例えば、五・一B、八・八B、一〇・五Aには墨が流れ、全く解読不可能な箇所が存在し、一・B、二・二B、六・八B、六・九A等の一部分の如き磨滅の激しい箇所も見受けられる。ただ、この程度の難点は現存する諸写本に比較して、比べようもなく僅少で、極めて優良な写本であることは、言う迄もない。

今日の学界は、従来の一二貝葉本相互間の比較研究により、既に写本の内容の類似性に基つき、類別化が行なわれ、原本の新旧が検討されている研究段階でもあり、極めて近い将来に、この貝葉本の資料的位置付けが定立されることは間違いないところである。

最後に、本学に寄贈されたこの梵文『妙法蓮華經』写本が、学的に貢献すること多大であることは当然のことながら、更に、このことが中国と本学との旧にも倍する友好の一助とならんことを念じ、妄評を詫びつつ、筆を擱く。

整理、蔵書目録の作製、再出版等に全館をあげて取り組んでいるとの報告は、必ず近い将来にその成果が我々に届けられるとの確信を抱かせる。

今回、寄贈された複製版は豪華な装丁が施された箱に納められ、その第一枚目は中国仏教協會会長・趙朴初氏が揮毫された書名『妙法蓮華經』が、二枚目は北京大学副学長・李羨林氏によるデーヴァ・ナーガリー書体梵文書名が、そして、三枚目(表裏)には同氏による引言が付されている。この写本は貝葉枚数一三七枚、二七四面で全体を呈しているが、最後の二三七Bは書写されていないので、書写面数は正確には二七三面となる。この写本の素材は貝葉であり、写本寸法は五四・三×四・九(cm)、写本の行数は六行、書体はクテイラ文字より成る。その書写年代は一〇八二年三月一七日と記されており、他の一二貝葉本とはほぼ同じ一世紀のものであるが、ネパール諸写本全体より見れば古層に属する。写本には梵夾用の二箇所(紐穴)があり、一面が三等分された形で書写されている。書体も同一人で書き綴られた如く、一定し統一がとれており、各一行における文字数も凡そ一二二文字前後と一定内に収められている。全体的に他の一二貝葉本と比較して、完全とも言える

写本で、その保存状態の極めて優れていたことが窺い知れる。しかし、厳密に眺めてみれば、若干の問題点もないことはない。例えば、五・一B、八・八B、一〇・五Aには墨が流れ、全く解読不可能な箇所が存在し、一・B、二・二B、六・八B、六・九A等の一部分の如き磨滅の激しい箇所も見受けられる。ただ、この程度の難点は現存する諸写本に比較して、比べようもなく僅少で、極めて優良な写本であることは、言う迄もない。